

## [国 語]

## 低学年における対比を用いた読む力を伸ばす取組

- 「じどう車くらべ」「スイミー」を中心とした2年間の実践を通して -

飯塚 澄人\*

## 1 主題設定の理由

学習指導要領における国語科の目標には、「思考力や想像力及び言語感覚を養い」という文言が記されている。さらに、目標の解説には「思考力や想像力などは、認識力や判断力などと密接にかかわりながら、生きる力として期待される」とある。認識力は、全教育課程において育成すべき力であるが、言語を用い論理的に思考したり豊かに想像したりする側面は、国語科の学習の中で培いたい力である。私たちは、どの発達段階でどのような認識力を育てていけばよいのかを意識しながら学習活動に取り組みさせる必要があるといえる。

西郷竹彦、櫻本明美らの認識力の発達段階によると、小学校低学年段階の指導の重点として、「比較」を挙げている。比較するという思考は、ある観点によって対象となる事物・事象を見つめ直すことである。これにより、対象の特徴がより明らかになったり、複数の対象を類別したりすることにつながる。観点に照らし合わせた比較や類別に根拠を求めることで、論理的な思考を行うことにもなる。ひいては対象を抽象化・一般化する思考の土台となるものである。小学校低学年段階から比較を用いて思考することは、抽象化や構造化の思考を育てることにつながる有効な学習になると考え、本主題を設定した。

## 2 研究の方法

1年生「じどう車くらべ」および2年生「スイミー」において、対象とその観点を明らかにして、対比的に読み取る学習を取り入れる。対比的な読みは、文章全体を構造的に捉えたり、対象の本質的な面を捉えたりすることができるようになることが期待できる。ひいては認識力の伸長を図ることを目的とする。発達段階を鑑み、単語に着目した対比から、文のまとまりや場面に着目した対比へと発展させていく。学習時の発言やワークシートへの書き込みにおいて、対比の対象となるものへの見方や考え方に変化・深まりが見られたかを評価していくこととする。

なお、本実践は、平成17年度の1年生（男子12名、女子12名）および18年度の2年生（男子13名、女子11名）を対象として2年間にわたり実践したものである。

## 3 授業の方法

## (1) 対象および観点の明確な提示

低学年の段階にあつては、観点を意識付けて読み取っていくことが重要であると考えた。教材文を読んだとき、1年生にとって好奇心をそそられ、興味を持つ部分は多様である。教材の本質とならない部分の言葉に着目してしまうことは少なくない。例えば、「とりのくちばし」（光村図書出版1年、以下すべて光村）では、種類によるくちばしの形状という観点を設定し、その差異から役割や生態の差異へと学習を進めていく教材である。子どもたちは、鳥を漠然と捉えているため、「家の周りにからすがたくさんいる」「おうむはしゃべる」といった断片的な知識や興味しかもっていない。数、外観、生態など話題が多岐にわたりかみ合わないために、鳥の種類による差異を考えたり一般化したりすることができない。こうした子どもたちに、「くちばし」という観点を与えることで、着眼点が焦点化され、種類ごとの比較を行うことができるようになるのである。2つのものを比較する場合、比べるものは何と何かを明確にした上で、何について述べるのか、即ち観点を意識化させることが、構造的な思考につながると考えた。

\* 上越市立大潟町小学校

## (2) 作表による視覚化、構造化

対比した内容を表にまとめることは、視覚的に分かりやすくなるため、特徴の明確化や構造化・一般化に役立つ。そこで、読み取った教科書の内容をワークシートに書き込んでいくと、表の形になるようにした。こうした活動も、1年生の子どもにとっては初めての学習である。縦軸と横軸の持つ意味といった表の見方を教えつつ、文章を表の形にまとめると分かりやすくなること、それを読み取ることで新たな発見があることなど、表にはさまざまなよさがあることに気づいていくことを期待した。1時間ごとの読み取った内容を書き込んだ表を重ね合わせて見ることで、新たな発見が子どもの中に生まれる仕掛けとした。

## (3) 説明文から物語文へ

対比を用いた学習は、1年生では、説明文を中心に行うことにした。説明文では、「とりのくちばし」「どうぶつのおちやん」に見られるように、比較する対象や観点が明らかであり、それぞれの特徴を対比的に捉えることが用意であるからである。2年生では物語文において対比的な読解を行うこととした。物語文における対比では、比較するものがストーリーの展開により変化するところにおもしろさや難しさがあるといえる。人物Aと人物Bにおける行動や心情の対比、一人の人物における初めの場面と終わりの場面の心情の変化や成長の対比、場面と場面における世界観の対比など、より広い視野を持った読解が求められる。2年生で扱う物語文教材「スイミー」や「お手紙」では、登場人物同士の比較（スイミーと赤い魚、がまくんとかえるくんなど）、場面ごとの比較（スイミーの最初の場面と最後の場面、お手紙を待っている2つの場面など）を扱うことが考えられる。いずれも、展開による物語のおもしろさを味わうことができるとともに、人物像や場面の様子を対比することで主題に迫ることができる教材である。子どもたちが、時間的な経過を追いつながりながら人物や場面を比較して読むことで、物語の内容を正確かつ豊かに読み取る方法を身に付けていくことが期待できると考えた。

## 4 研究の実際

### (1) 1年生における実践 ～「じどう車くらべ」の実践（指導時期 11月中旬）

#### (ア) 教材の特性

本教材で扱う自動車に対する子どもたちの興味・関心は非常に強く、知識も豊富である。しかし、子どもの興味の中心は、色や形、スピードといった表面的なものに限られる。それに対し、本単元では「しごと」と「つくり」という別の観点からものを見ることを提示している。さらに、それらの観点について、「じどう車くらべ」の題名の通り、それぞれの自動車の仕事の相違点や類似点と、それによる自動車の構造の違いを比べながら読み進めていくことが求められる。

読み進めた後には、自分の調べた自動車について学習した形式を用いて説明文を書く活動が設けられている。そのため、別の車種を見る際にも、「しごと」「つくり」の観点を念頭に観察をすることが不可欠である。この学習を通して、観点を定めることではじめて二者、三者の比較が成立することを子どもに学ばせることができると考える。

#### (イ) 学習計画（全10時間）

次	時	学 習 活 動	対 比
1	1	『じどう車ずかん』作りを計画する。	
	2	仕事とつくりについて読み取っていくことを知る。	
2	3	バスと乗用車の仕事とつくりを読みとる。	
	4	トラックの仕事とつくりを読みとる。	バス・乗用車⇔トラック (仕事) 人を乗せる⇔荷物を載せる (つくり) 広い座席⇔広い荷台、窓がたくさん⇔タイヤがたくさん
	5	クレーン車の仕事とつくりを読みとる。	バス・乗用車⇔クレーン車 (仕事) 人を乗せる⇔荷物を吊り上げる トラック⇔クレーン車 (仕事) 荷物を載せる⇔荷物を吊り上げる (つくり) タイヤがたくさん⇔頑丈な足
	6	はしご車の問題提示に答え説明文を書く。	

3	7	自分の調べたい自動車を調べてくる。	
	8	教科書に載っていた自動車と、自分の調べた自動車の仕事とつくりについて比べる。	教科書で学習した自動車⇔自分の調べた自動車（ポンプ車など）
	9	自分で調べた自動車の仕事とつくりの資料を使って説明文を書く。	
	10	作った図鑑の発表をし、まとめをする。	

#### (ウ) 実践の概要

まず、「しごと」と「つくり」の観点を常に頭において学習に取り組めるよう、板書やノートへの書き込み、教科書に線を引く際には、常に「しごと」は赤、「つくり」は青で色分けをしまとめることとした。それぞれの自動車の特徴を理解した上で複数の車種を比較することで、それぞれの特徴をより明確にしていった。

例えば、バスとトラックの仕事と比較すると、その類似点は運ぶことであり、相違点は運ぶものが人が荷物かという点である。この違いを2種の自動車を比べる中で明確化することで、自然とそのつくりの違いも明らかになってくる。1年生にとって、数ページに渡る文章全体を比較しながら読むことは難しいので、1時間に1ページ（1種類ずつ）読み取った。順にワークシートに表にしてまとめていき、それらを並べて見ることで、全体を見通せるようにした。

#### ●二者の対比

右の表は、バスとトラックについてまとめたものである。第3時にバスについて、第4時の前半にトラックについての仕事とつくりをそれぞれ読み取った。仕事とつくりで表を作り、短い言葉で特徴をまとめていった。その上で、2種の自動車の仕事についての比較を行った。「似ているところは？」という発問を通して、逆にその違いを明らかにしたいと考えた。

まず、「仕事の似ているところはどこか」という発問に対しは、「運ぶところ」という答えが出された。2つの表を並べて比較したとき、子どもたちは、表にある「はこぶ」という言葉を見つけ、仕事で似ている部分があることに気づいた。一方で、運ぶものの違いも読み取っていて、「バスは人を乗せているけど、トラックは荷物を運ぶから、全然違う形をしているんだよ。」と、それによるつくりの違いにも気がついていた。

つくりの比較の場面では、「たくさん」「ひろい」という共通する言葉をきっかけにしながら、仕事との因果関係からその特徴を考えていった。教師の「なんでバスは窓がたくさんついているの？」という発問に対し、「人がいっぱい乗るから、景色がよく見えるように。」「バスに乗る人は、座席が大きくて人がたくさん乗るから、みんなが景色を見られるように。」という答えが聞かれた。さらに、「なんでトラックはタイヤがたくさんあるの？」に対しては、「重い荷物をたくさん載せるから。」「重たいのをたくさん載せる時に、ぐらぐらしないように。」「タイヤがたくさんついていると、荷台が広がるから、荷物がたくさん載せられる。」という答えが聞かれた。

これらの子どもの反応は、乗せるものが人であるか荷物であるかという本質的な違いが念頭にあるからこそ、つくりの違いにまで言及できたものと考えられる。どちらか一方のみを扱っていたならば、景色が見えるよさ、荷台に荷物をたくさん載せられるよさといったつくりの特徴について、実感を伴った解釈することはできなかったと考える。

#### ●三者の対比

5時では、前半にクレーン車の仕事とつくりの読み取りを行った。その上で後半にバス・トラックとクレーン車の比較を行い、クレーン車の特徴を明らかにすることを狙った。

まず、仕事について三者の表を並べて同時に対比する話し合いを行った。「クレーン車と、バスやトラックの仕事で似ているところはどこか」と発問したところ、「トラックは重い荷物を運ぶし、クレーン車は重い物を吊り上げて運ぶんだから似ている」「バスは乗せてどこかへ行く物で、クレーン車はその場所の上へ吊り上げるものだから、似

トラック		バスやじゆりや車	
しごと	はこぶ	人を乗せてはこぶ	しごと
つくり	タイヤがたくさんついている	大きなまどがたくさんあり	つくり

図1

ているところはない」という反応を得た。これにより、つくりの話し合いをする際にはバスが除外され、二者の対比を行うこととなった。

クレーン車とトラックの二者の対比となると、既習の方法であるので、より活発に意見の交流を行うことができた。両者のつくりの類似点を発問したところ、「タイヤのところが似ている。」「重たいものを運ぶから、クレーン車はしっかりした足がついていて、トラックはタイヤがたくさんついているところが似ている。」と、仕事との関連からつくりの似ている点を述べることができた。一方、クレーン車とバスのつくりで似ているところはないかと発問したところ、「人を乗せて運ぶ」と「重い荷物を吊り上げる」といった仕事の本質的な違いに気づいた子どもたちから、「だからつくりでも似ているところがないんだよ。」という発言が引き出された。

今回の実践では、仕事とつくりについて色分けをするなどして強く印象付けることができたために、何について述べるのが明確となり、ここに見られるように両者を関連付けた思考ができるようになったと評価できる。これにより、対比する車種が増えていっても同じ枠組みの中で自動車を抽象・分類することができ、それぞれの自動車の特徴を明確にすることができたと考える。

## (2) 2年生の実践 ～「スイミー」の実践（指導時期 6月下旬）

### (ア) 教材の特性

スイミーにおける対比には、同一場面内の対比と、複数場面における対比とがある。

同一場面では、スイミーと赤い魚の兄弟との対比がある。第1場面では、色や数からスイミーの特異性が明らかにできる。さらに、第4場面の元気を取り戻してきたスイミーと岩陰に隠れている赤い魚の対比では、勇気を出し追い出す方法を考えるスイミーと、おびえながら隠れている赤い魚との言動の違いを考えることで、スイミーの人物像に迫ることができる。と考える。

一方、複数場面の対比としては、最初の場面と最後の場面の対比が考えられる。双方とも、平和に暮らす世界が描かれているのだが、最初の場面は、まぐろに襲われる危険をはらむ表面的な平和であり、最後の場面は、恐怖の対象を全員の協力で追い出した本当の意味の平和である。この両者を比較することは、スイミーの世界観や主題に迫ることになる。

### (イ) 学習計画（全14時間、本時 7/11）

次	時	学 習 内 容	対 比
1	1	題名読みをし、全文を音読する	
	2	感想を発表し、学習のめあてを持つ。 新出漢字や語句の確認をする。	
2	3	第1場面を読み、兄弟たちと楽しく暮らしている様子を読み取る。	赤い魚たち⇔スイミー 赤⇔黒、たくさん⇔1匹
	4	第2場面を読み、まぐろや逃げる魚たちの様子を読み取る。	赤い魚たち⇔スイミー 食べられる⇔逃げられる、遅い⇔速い
	5	第3場面を読み、スイミーが見た海の底の生き物たちの様子を読み取る。	2の場面⇔3の場面 怖い⇔楽しい、まぐろ⇔いせえびやうなぎ
	6	スイミーの気持ちの変化を考える。	
	7	第4場面の前半を読み、スイミーと赤い魚の出会いを読み取る。	赤い魚たち⇔スイミー 隠れる⇔戦う、臆病⇔勇気
	8	第4場面の後半を読み、スイミーの考えた作戦を読み取る。	
	9	第5場面を読み、第1場面と比較することで、スイミーの成長・変容について考える。 物語の主題を考え、感想をまとめる。	1の場面⇔5の場面 見せ掛けの平和⇔本当の平和
3	10	レオ＝レオニの本や、気に入った本の紹介文を書く。	
	11	お互いの紹介文を読みあう。	

### (ウ) 実践の概要

全体を5つの場面に分けて学習を進めていくこととした。物語を追って場面の様子や情景を想像しながら読み取るとともに、それぞれの場面でスイミーら登場人物の心情を考える機会を持つことで、スイミーの心情に迫りたいと考えた。ワークシートとして、場面毎のスイミーの気持ちをふきだしに書き込むもの、スイミーの心情曲線を描くもの、スイミーと赤い魚の対比表を用意した。

登場人物同士の対比を行うにあたり、「スイミー」においても、視覚的にも分かりやすくするために対比表を作りながら学習を進めていくこととした。対比の対象は、スイミーと赤い魚たちである。「両者の違いは何か」と問うことで、スイミーの特異性（色、知恵、勇気など）を明らかにしたいと考えた。対比は、第1、2、4場面の3回にわたり行った。

場面同士の対比にあたっては、場面の持つ雰囲気や意味合いをおさえる必要がある。場面の様子をつかむために、大きな挿絵のついたワークシートを用いることにした。子どもたちは、ワークシートの絵に色を塗ったり、登場人物の気持ちを想像してふきだしに書き込んだりしながら、場面の様子をつかんでいった。

#### ●スイミーと赤い魚たちの対比

対比表を作るにあたっては、着眼点として代表的なものを2～3項目を提示し、そのほかに自分で見つけた違いを書き込むこととした。

第1場面では、個人の読み取りで表に違いを書き込んだ後、発表の時間を設けた。色、数が出た後、他にないかをたずねたところ「スイミーは泳ぐのが速く、他の魚は遅い。」「スイミーは名前があり、他の魚は名前がない。」という意見が出た。そこで、本当に遅いのか、名前がないのかを話し合った。「遅いのもいれば、速いのもいる。でも、スイミーが一番速い。」「他の魚にも名前があるはず。スイミーは黒いし、賢いから特別ですぐに分かるけど、他の魚たちは泳いでいるうちにどれか分からなくなっちゃう。」という意見が出された。両者を対比することにより、スイミーの特異性、赤い魚たちの性格が明らかになった。第1場面や第2場面では、はじめは表面的に一読して分かることが書かれていたが、話し合いの中で気持ちや想像したことなどが挙げられるようになっていった。表の枠だけを作り、着眼点を挙げないワークシートを用いたことにより、子どもたち自身が多面的に違いを考えることができた。

これを土台とし、第4場面の元気になったスイミーが、おびえている赤い魚たちと出会う場面の両者の対比を行った。いる場所、言った言葉などが挙げられた後、両者の気持ちを考える場面では、赤い魚たちの気持ちは「怖い」「おびえている」でそろったが、スイミーは「うれしい」「少し困っている」「勇気を持っている」とに分かれた。これらの違いを話し合う中で、「新たな仲間に出会えてうれしい」という反面、「仲間がいても、まぐろが怖くて岩かげから出られなくて、一緒に遊んだりいろいろな生き物を見に行けないから残念」、だから「まぐろを追い出して、みんなが楽しく遊べるように作戦を考えよう」というスイミーの気持ちの変化を考えることができた。この対比から、「そこにじっとしているわけには行かないよ」と言うスイミーの心情や強いリーダー像を、赤い魚の状況と対比することで捉えることができた。

#### ●場面同士の対比

物語全体を読み取った後、第9時には第1場面と第5場面との対比を行った。「第1場面と第5場面を比べましょう」という発問では漠然としているために、「第1場面と第5場面では、どちらが幸せだろう」という発問とし、その理由を問う中で、対比的にまとめていきたいと考えた。

23人中（1名欠席）20人が第5場面が幸せといい、3人が「同じくらい」と答えた。第1場面を選んだ子に理由を



図2

尋ねると、「もしかすると、また大きな魚が来るかもしれないから。」「もともと楽しかったんだから、同じ。」というものだった。両者の意見を話し合わせたところ、第5場面の方が幸せだと答えた子どもたちからは、次のような意見が出された。「大きな魚が来ても、もう追い出す方法が分かっているから安心して遊べるはず。」「第1場面は、みんながばらばらに遊んでいるけど、第5場面はスイミーがリーダーになってみんなで協力できるようになった。」「第2場面、第3場面でつらいことがあったから、みんなと遊べる楽しさがもっとうれしと感じられるようになった。」これらの意見を受け、第1場面を選んだ3人も第5場面の方が幸せという考えに変わっていった。

2つの場面を対比するには、場面の状況や登場人物の様子、先の場面から後の場面までの変化のあり方など、多くの要素を同時に考えなければならず、難易度は高いと考えていたが、多くの子どもたちがそれらを関連付けて考え、対比的に読み取ることでスイミーや赤い魚の心情に迫る読みができたことは評価したい点といえる。

## 5 研究の成果と課題

比較（類比や対比）することで読み取りを深める方法は、どの学年においても有効な方法である。観点を定め、比較しながらの読みは、説明文「どうぶつの赤ちゃん」（1年）「アップとルーズで伝える」（4年）をはじめ、物語文「ちいちゃんのかげおくり」（3年）、「やまなし」（6年）など、多くの教材で用いることができる。発達段階に合わせ、比較しながら読む活動を計画的に取り入れていかなければならない。

今回の2つの実践では、何と何を比べるのか対象を明らかにし、どういう点を比べるのか観点を明確に意識付けながら読み取りをしてきた。低学年においても、対象および観点が明確になることで、両者の類似点や相違点を考えることができ、対象の持つ本質に迫ることができた。また、「ここが似ているのは、～～だから」と自分の考えを根拠付けながら述べるができる子どもたちが多かった点からも、対比的な見方を培うことが論理的な思考の伸長につながると考えられる。

対比する場面においては、ワークシートを用いて表にしながら読み取りを行ってきた。表の形式は、縦軸と横軸との交差を考えなければならず、低学年にとっては難しい面もあるかと危惧したが、それぞれの性格を視覚的に見取ることができ、内容理解を深めることに役立った。また、1年生の「じどう車くらべ」では、「ひろい」「たくさん」といった単語に反応し、それをもとに対比関係を考えていった。2年生の段階でも、場面ごとの読み取りにおいては、「黒い」「一匹」といった単語での捕らえが多かったものの、最終段階では、より長い文の集まりである場面と場面の対比ができた。

場面と場面の対比を行うためには、場面内のさまざまな要素同士を対比的に考え、その場面を一般化していく思考が必要となってくる。それはまた、文章全体の中での場面の位置づけを構造的に考えることにもなる。一つ一つの対比が根拠となり、論理的に構造化されていくものであろう。こうした思考のうち、今回の実践では、低学年段階としての場面と場面の比較ができたことを評価したい。どの段階でどのような対比を用いることが認識力の向上に役立てられるのか、今後とも研究や実践を重ねることの必要性を改めて感じている。

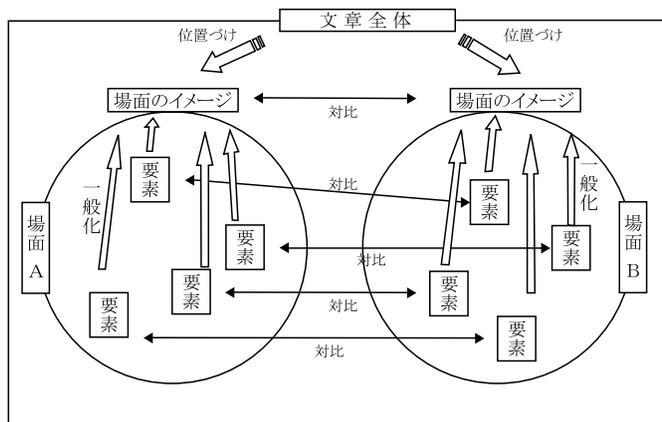


図3

## 参考文献

- 西郷竹彦 『西郷竹彦 文芸・教育全集4 教育的認識論』 恒文社, 1996, pp.125-365  
 櫻本明美 『説明的表現の授業 考えて書く力を育てる』 明治図書出版, 1995, p.62  
 鶴田清司 『「スイミー」の〈解釈〉と〈分析〉』 明治図書, 1995, pp.96-111